

『日本靈異記』についての一考察

尾崎 円郁

『日本靈異記』とは

『日本国現報善悪靈異記』、通称『日本靈異記』（以下『靈異記』）は、「諾楽の右京の薬師寺の沙門」景戒が、一般庶民の仏教教化のため民間布教者（私度僧）によって各地で語られた話を集めて編纂した日本最古の仏教説話集である。本書の主題となっているのは「因果の理」、すなわち善悪の行いに対して何らかの報いがもたらされるという世界観である。善行に対しては災難を逃れたり財貨を得るなどの福がもたらされ、悪行に対しては異常な死を迎えたり、死後に地獄で苦役を受けたり、動物に生まれ変わって飢えや過酷な労働をさせられることとなる。本書における善行とは、仏を深く信仰して仏法僧の三宝を守る、殺生をしないことなどをいい、反対に悪行は乞食僧を迫害するなど仏法を誹る行為や、殺生や外道の神を信仰するなどの行為のことで、これら善悪の基準は仏教的な道德観念に基づくものである。仏教が土着の信仰にとってかわるような影響力をいまだ持ち得ない時期にあって、このような道德観は民衆には馴染みの無い新しい観念であった。

この仏教思想に基づいた道德観念を仏教の基礎知識のない庶民に説くにあたって、ただ理念のみを抽出して説いて受容させるのは容易ではない。そこで語り手は、聞き手である民衆の生活に密着した場面設定に仏教的な世界観のストーリーを織り込んで、因果の理を現実のものとして認識させようとした。このような手法によって登場人物と明日の自分を重ね合わせる共感が生まれ、話中で起こったような善悪の報いが自分の身にも訪れるかもしれないと思わせることができるのである。また、正式名称に「現報」とあるが、これは現世での行いに対する報いが現世のうちに訪れることをいい、本書の中で最も多く収録されている応報のパターンである。それは来世や来々世といった遠い未来より、今日の行為の結果が明日の我が身に訪れる現報の方が庶民の関心を引くと考えた景戒の配慮の表れであろう¹。本書で顕われる悪報は厳しいものが多いが、地獄に落ちたとしても生前に写経や放生（捕らえられた生き物を逃がす）を行っていたために死後それらの功德が身を守ったという話や、死後に子が追善供養を行ってくれたおかげで親が苦しみから解放されたという話も収録されており、抽象的な教義よりも聞き手の

想像力を刺激することを優先した物語によって、仏教信仰を奨励している。

このように、『靈異記』の説話の構成や編集には編者景戒の持つ世界観・人間観が表れているが、今回は説話の語り手である遊行の私度僧²が登場する説話を検討することで、僧と仏法の関係を景戒自身がどのように捉えていたのかを考察する。

『靈異記』の私度僧観

『靈異記』が編纂された平安時代初期、仏教は国家によって厳しく統制されていた³。教化活動は寺院内に限定され、出家にも国家の承認が必要とされていた。このような不自由な状況に関わらず、市井で自由な教化活動を行うために、私的に出家して各地を遊行する私度僧は後を絶たなかったのである。しかし、単に物乞いをするため私度僧になる者も少なからずいたようで、私度僧は税も納めず定住しない浮浪人の一種と見なされることもあったようだ（下-14）。『靈異記』においては私度僧の多くが罵られたり、打たれて追い出されるなどの迫害を受けるケースが多いが、これは当時の状況を反映しているものと思われる。編者の景戒が当初は私度僧であったという説もあり⁴、『靈異記』における私度僧の扱いは、彼の私度僧への深い共感が読み取れる。「われは学ぶところなし。ただし般若陀羅尼をのみ誦持し、食を乞ひて命を活けらくのみ（中-15）」と自ら称する僧を筆頭に、『靈異記』に登場する私度僧のほとんどがみすばらしい乞食僧である。他にも「濫しく供養を盛るところに就きて、鉢を捧げて飯を受」けて長屋王に頭を強く殴られてしまう者（中-1）や、法要を頼まれた家の蒲団を盗もうとする者（上-10）までおり、まるで聖人には程遠い、ある種非常に人間臭い人物が多い。このような僧であっても、かれらを迫害した者は悪報を受けることになるのである（上-19、中-1、下-14など）。このような物語展開は、これらの説話が各地で布教活動を行う私度僧たちが自己防衛のために語った悪報譚であるゆえであろう⁵。

しかし、『靈異記』内で私度僧が全面的に擁護されているのかといえば、必ずしもそうとはいえないのである。私度僧の中にも悪報を受けている者がおり、例えば人を騙して財貨を掠め取り、拳句の果てに寺の柱

を燃料に使った報を受けて死んだり（上-27）、乞食僧を誹って口が歪んだ私度僧（上-19）などが本書には登場している。また、行基に代表される「隱身の聖」^{おんじんのひじり}を誹った寺の僧が悪報を受ける話もいくつか存在し（中-7、下-19など）、出家者という身分が仏の加護を受ける直接の要因にはなっていないことがわかる。

結論

景戒は私度僧という身分を特別視してはいたが、『靈異記』の世界において私度僧＝聖人という図式は必ずしも当てはまるものではない。むしろ、かれらも俗人と変わりなく、同じ因果の理の中の存在として扱われているようである⁶。私度僧が他と異なるのは、民衆の間で読経を行うという点においてである。布教のため、生活のため、動機には個人差があるが、いずれにせよ私度僧は経を読誦することによって（本人が無自覚であっても結果的には）一般庶民へ仏教を伝播する役割を果たしており、それゆえに仏法の伝道者とみなされる。つまり私度僧に起こるさまざまな靈験は、仏法を護持するかれらを仏が守護しているということの顕れなのである。靈験は（下-14）のように法師自らが呪いを行って使ってもたらされる場合もあれば、（下-19）のように迫害されたとたんに守護神が現れて、迫害者に罰を下す場合もある。ちなみに（上-10）で僧が盗みをはたらく直前に牛（に転生した家主の父）に諭されたのも、僧に罪を犯させないための仏の加護の顕れともとれる。仏法の守護者である私度僧を侮辱したり、危害を加えることは、仏法を誹謗することと同等であるので、かれらに害した者は様々な悪報を受けることになるのである。反対に、仏法を大切にしない私度僧は仏に守護される理由を持たない。つまり（上-27）の似非坊主は仏教の伝道者としての役目を果たさないどころか、嘘をついて集めたお布施を生活費に充てたり、寺の一部を薪にするなどして仏法を侮辱したので、その悪行の報を受けて地獄の業火に焼かれながら死に至ったのである。

（資料）『日本靈異記』各話のあらすじ

（下-14）「千手の呪を憶持するひとを拍ちて、現に悪死の報を得る縁」

越前の国に浮浪人を取り締まり、雑役に追い使って調庸の税を強要する役人がいた。そこへ京からやってきた千手経を唱え勤行する朝臣庭鷹という優婆塞（在俗のまま仏門に入って修行する者）がやってきた。役

人が「おまえは、どこの国の者だ」と聞くと、朝臣は「私は修行者で、俗人ではありません」と答えた。すると役人は怒って「おまえは浮浪人だ。どうして調を納めないのか」と言い、朝臣を縛り上げて打ちのめし、雑役に従事させた。朝臣はなおも抵抗し、千手経の呪法を行使する。役人が家に帰りつき、馬から降りようとすると身体が硬直して降りられない。たちまちのうちに馬ごと空に舞い上がり、朝臣を打ちのめした場所まで連れ戻されてしまった。そのまま空中で一日一夜を経たあくる日の午の時刻、役人は空から落ちてばらばらに砕けて死んだ。そのありさまを見て恐れない者はいなかった。

（中-15）「法華経を写したてまつりて供養することによりて、母の女牛となりし因を顕す縁」

高橋の連東人は、亡き母の法事のために法華経を写経し、法師を招いて供養を行う誓願を立てた。あくる日に、最初に出会った僧を招いて供養を頼むよう使用人に言いつけ、探しに行かせた。使用人が見つけたのは酒に酔いつぶれている間に髪を剃られ、袈裟のように縄をかけられて僧の姿にされた乞食だった。だが使用人は主人の言いつけに従って、この乞食を連れて帰った。東人は乞食を丁重に扱い、法服を作って差し上げた。乞食は困惑し「わたしは何も学んではおりません。ただ般若陀羅尼だけを誦持して食いつないでいるだけの者です」と言って断るが、東人が引き下がらないので、密かに逃げる決心をしたが、見張られていて逃げることはできなかった。その夜、乞食法師の見た夢に赤い雌牛が現れて、自らを東人の母と名乗った。前世で子の物を盗んで使ったとがで、今生は牛に生まれ変わってその負債を償っているのだという。このことが真実であることを証明するために、説法をする堂の中に座を設けてくれればそこに座ってみせると伝えた。目覚めた法師は驚き、翌日講座で夢の内容を詳細に語った。実際に座を敷いて雌牛を呼ぶと本当にそこに座った。息子である東人は大いに泣き、母の罪を許した。法事が終わると牛はそのまま死んだ。東人はその後も母のために重ねて功德を修めた。

（中-1）「おのが高き徳を待み、賤しき形の沙弥を刑ちて、現に悪死を得る縁」

聖武天皇が天平元年の春、元興寺において大法会を催しなされたとき、僧たちに食事を供養する役目を長屋王に命じた。そのとき、一人の僧があつかましく供

養の食事を盛っているところまでやってきて、施しを受けた。それを見た長屋王は持っていた杓でその僧の頭を打った。僧は頭から血を流し、恨めしく泣き声をあげると急に姿を消した。法会に集まった人々はこれを見て「不吉である」とささやきあった。それから二日後、長屋王を妬む人が天皇に「長屋王が謀反を企んでいる」と讒言すると、天皇は怒って長屋王のもとに兵を差し向けた。覚悟を決めた王は親族の命を絶った後、自分も毒薬を飲んで自害した。王と親族の遺骸は勅命により平城京の外で焼き砕かれ、河や海に流された。しかし長屋王の骨が流れ着いた土佐の国では、多くの民が死んだ。天皇はこれを聞くと、王の骨を都に近づけないように、紀伊の国の奥の嶋に置かせた。

(上-10) 「子の物を^{ぬす}偷み用ゐ、牛となりて^{つか}役はれて
^{あや}異しき^{しるし}表を示す縁」

大和の国の土椋の家長の公は、法華経によって前世の罪を懺悔しようと考えた。そこで使用人に命じて、最初に出会った僧を連れて来させた。法要が終わった夜、僧が寝ようとする、家長が被（掛け布団）をかけてくれた。僧は「明日お布施を貰うより、今この布団を盗んだ方がいい」と思い、布団を持って家を出ようとする。「その布団を盗んではいけない」という声が出た。驚いて家の中を見回すが、いるのは倉の下に立っている一頭の牛だけである。牛は僧に、自分は家長の父の生まれ変わりだと告げた。前世で息子に黙って稲を十束取ってしまい、今は牛に生まれ変わってその罪を償っているのだという。このことの本質を確かめたいなら、自分のために座席を設ければそこに座ってみせようと言った。ここで僧は自らの行為を大いに恥じ、引き返して一夜を明かした。翌日の法要が終わると、僧は親族だけを集めて前夜のことを事細かに話した。家長が座席を作ると昨夜告げたとおり、牛はそこに座った。牛が父であることを知った家長が牛を礼拝して前世の罪を許すと、牛は涙を流して大きく息をついた。その日の申の時に牛は死んだ。家長は昨夜僧が盗もうとした布団と財物をお布施として施し、さらに父のために功德をつんだ。

(上-27) 「邪見なる^{けみょう}仮名の沙弥、塔の木を^き斫ぎて、
悪報を得る縁」

石川の沙弥は自度僧で正式な僧名がなく、俗称も明らかではない。姿こそ僧をまねてはいるが、心は盜賊のそれであった。あるときには「塔を建てる」と嘘を

ついて人に寄進を求めて集めた財貨をそのまま懐に納め、家に帰って妻と共にその金で飲み食いをした。またあるときには摂津の国の春米寺に住みついて、塔の柱を切り取って燃料にして仏法を汚した。これ以上の無法ぶりは他にはないというほどであった。ついに石川の沙弥は味木の里で病気にかかり「熱い、熱い」と叫んで地面から一〜二尺ほども飛び上がった。その様子を見て「なぜそんなことをしているのか」と人が問うと「地獄の火がやってきて自分を焼いているのだ」と答えた。沙弥はその日のうちに死んでしまった。

(上-19) 「法花^{あざけ}経品を^{ゆが}読む人を^{ゆが}忤りて、現に口^{ゆが}喞斜
みて悪報を得る縁」

昔、山背の国のある自度僧が、俗人と碁を打っていた。そこへ乞食が来て、法華経を読んで物乞いをした。すると自度僧は軽蔑し、嘲りながら自分の口をわざとゆがめて乞食の読む経の口真似をした。俗人は碁を打つたびに「畏れ多い、恐ろしい」と言った。碁は全て俗人が勝ち、自度僧は何度打っても負けた。自度僧の口はゆがんでしまい、薬で治療してもついに治らなかつた。

(中-7) 「智者、^{へんげ}變化の^{しょうにん}聖人を^{うらや}誹り妬みて、現に^{えん}閻
^ら羅の^{みかど}關に至り、地獄の苦を受くる縁」

鋤田寺の釈智光は生まれつき聡明で、智恵は第一人者といわれた。盂蘭盆・大般若・心般若などの経の注釈書を著して、学僧のために仏の教えを読み教えた。一方その頃沙弥行基という人がおり、人柄がかしこくて、生まれながらに才知があった。すでに菩薩の位を得ていたのだが、外見は修行者の姿をしていた。聖武天皇は行基の威徳に感じいて重用し、天平十六年十二月をもって大僧正に任じた。智光は行基に嫉妬し、「わたしは智人、行基は沙弥であるのに、なぜ帝はわたしの智恵をお認めにならず、行基ばかりを誉めて重用なさるのだ」と非難した。時勢を不満に思って故郷に退いてすぐに病気にかかり、一月ほどで臨終を迎えた。死の直前、自分の死体を十日ほどそのままにして、死んだことを伏せておくよう弟子に遺言を残した。弟子は遺言に従い、師の部屋の戸を固く閉じて秘密を守った。一方死んだ智光は閻羅王（閻魔王）の使いに召されて連れて行かれる途中、黄金の宮殿を見かける。使者によればそれは行基菩薩が往生した後に住むことになっている宮殿であった。閻羅王の前に召しだされた後、智光は三日ごとに熱く熱した鉄や銅の

柱を抱かされ、阿鼻地獄に投げ込まれた。これらは行基菩薩を誹謗した罪に対する罰であった。罰を受け終えて地獄より帰されて蘇った智光は、弟子に向かって地獄での出来事を詳細に語り、その後難波にいる行基の元へ向かうと、彼を妬み誹謗したこと、その罪によって地獄で刑罰を受けたことを懺悔した。智光から自分が住むことになっている宮殿の話を知ると、行基は「喜ばしい、尊いことだ」と言った。それから智光法師は行基菩薩を信仰し、彼が明らかに聖人であることを知った。行基菩薩は天平二十一年二月二日に亡くなった。法師の姿を捨てて、その魂は黄金の宮殿にお移りになったのである。

(下-19) 「産^うめる肉^{しむら}団^{おみな}のなれる女子、善^はを修し人を化^はする縁」

肥後の国の豊服の広公の妻が懐妊して、卵のような肉の塊を産んだ。夫婦は「よいしるしではない」と考えて山の石の中に隠しておいた。七日目に見に行ったところ、肉塊の殻が開いて女の子が生まれていたの、夫婦はこの子を育てた。八ヶ月を過ぎて急に大きくなった女の子は、頭と首がくっついて下顎がないなど、人とは異なる姿であったが生まれつき賢く、七歳になる前に法華経と八十卷の華嚴経をちゃんと方式どおりに読めるほど聡明であった。ついには出家を願って髪を剃り袈裟を身に着け、仏教を修めて人々を教化した。その読経する声は尊く感銘させるものがあり、彼女の教えを信じない者はなかった。愚かな俗人たちは異形の姿を嘲笑して「^{さるじり}猴聖」とあだ名した。あるとき、託磨の国分寺の僧と豊前の国の大神寺の僧の二人がこの尼を妬んで「外道である」と嘲笑いからかったところ、不思議な人が空から降りてきて、鉾でかれらを突こうとした。二人の僧は恐れ叫んでついに死んでしまった。またあるとき、肥前の大領が戒明大徳を呼んで法会を開いた。戒明法師が八十華嚴経を講釈しているときにその尼も人々に交じってこれを聞いていた。戒明法師はこれを見て「無作法にも聴衆の中に混じっているのはどこの尼だ」と呵責した。それに対して尼は「私は平等の慈悲をお持ちなのだから、全ての人々のために正しい教えを広めなされるのです。どうしてことさらにわたしをのけ者にするのですか」と反論した。尼が戒明法師と問答をしたところ、法師は答えられなかった。これを見た他の名高い知識層が次々と

質問をして尼の才智を試したが、彼女は答えられないことがなかった。このことでこの尼が聖者の化身であることがわかり、「舍利菩薩」と呼ばれるようになった。みな彼女に帰依し、教化の指導者として信仰した。

【参考文献】

- 小泉道・校注『新潮日本古典集成（第六十七回）日本霊異記』、1984年、新潮社
- 頼住光子「日本古代における「カミ」信仰と仏教受容に関する一考察—『日本霊異記』に即して—」（『淳心学報』第7号、1988年、現代人文学研究所）
- 駒木敏「『日本霊異記』と民話的手法」（『日本文学』vol.24-No. 6、1975年6月）
- 霧林宏道「『日本霊異記』における行基説話の一考察—女性教化の視点から—」（『國學院雑誌』第102巻第12号、2001年）
- 曾我部順子「『日本霊異記』の一考察—現報のあらわれ方について—」（『女子大國文』vol.101、1987年6月、京都女子大学国文学会）

注

- 1 現報譚を多く採用した景戒の意図に関しては、曾我部順子「『日本霊異記』の一考察—現報のあらわれ方について—」、頼住光子「日本古代における「カミ」信仰と仏教受容に関する一考察—『日本霊異記』に即して—」などでも指摘されている。
- 2 小泉道によると、「私度僧」は「自度僧」とも表記し、特に景戒は自主的に得度したという意を込めて「自度」を用いているという（新潮社版解説より）。ただし今回は「私度僧」に統一して表記している。
- 3 仏教を重んじた聖武・孝謙朝では僧の得度も大幅に認められていたが、称徳朝で僧道鏡が莫大な権力を掌握するという事件が起こり、その後の光仁・桓武朝では私度僧の取締りなど、方針の転換がとられた。（小泉道・注、新潮社版『霊異記』解説より）
- 4 「薬師寺の沙門」景戒が元々私度僧であったという説は、彼が遊行僧である行基の関係する説話を多く採用している点からも指摘されている。（霧林宏道「『日本霊異記』における行基説話の一考察—女性教化の視点から—」など）
- 5 駒木敏は「『日本霊異記』と民話的手法」の中で、乞食僧の迫害説話の背景には、土着の神を信仰する地域に仏教が浸透する過程での葛藤があったとしている。
- 6 ただし、行基や（下-19）の尼のような人格的に優れた聖人は別格に扱う必要がある。